

〔研究論文〕

J.-J.ルソーにおけるネイチャーライティング（環境文学）

荒井宏祐

〔Article〕

A Study of J.-J. Rousseau's Works from the Viewpoint of Nature Writing

Hirosuke ARAI

Abstract

The aim of this paper is to discuss a new viewpoint of J.-J. Rousseau's literature in regards to current nature writing studies which are producing a new branch of modern literature research in ourtime.

I try to compare articles of nature writing with Rousseau's works on the relationship between nature and human being by pointing out three aspects as follows.

1 Can I find any similarity between insistence of "The Sense of Place" in natural writing research and Rousseau's works?

2 Is there any relationship between assertion of "Correspondence and Representation" in nature writing studies and Rousseau's works?

3 How about passing criticism of environmental problems?

After discovering similarities, relationships, and criticisms mentioned above, I conclude that Rousseau's works as "L'inégalité", "Émile", "La Nouvelle Héloïse" and "Rêveries" etc, are included characteristics of "Post-Romantism" which is called by nature writing research, and that they may create a new position for Rousseau's literature in the present age.

はじめに

本稿では、現代における文学研究の新潮流の一つである、Nature Writing（ネイチャーライティング）研究に着目し、そこで主張されている事柄とルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712～1778）の作品との関連について検討を試み、ルソー文学研究に新しい視点を導入しうるかどうかが考察を加えることを目的としている。

これまで筆者は、ルソーにおける自然界の認識や描写の諸相を吟味するとともに、これらと社会、政治、教育、宗教などの認識、あるいは老年期の自己意識等との関連を検討してきた⁽¹⁾。本稿はこうした検討の一つであり、吟味の焦点をルソーの文学作品における環境としての自然認識と、現代におけるネイチャーライティング研究の主張との関連に置こうとするものである。

なお、以下では「ネイチャーライティング」についての理解を図るため、先行研究の内容をやや詳しく紹介することとする。またルソーとの関係については、極力再説を避けるため、既出の拙論の所在をあげるにとどめる場合がある。

また、本稿では「ネイチャーライティング」を「自然界と人間、社会との関係について言及した文

学作品」の意味で使用し、単に「環境文学」ということがある。

文注は〔A〕の分類記号のもとに番号を（ ）で、文献引用は、〔B〕の分類記号のもとで、本文末にあるような文献番号－頁数で示し、邦訳がある場合は、原書－頁数、訳書（原書の文献番号と同じ）－頁数の順で記す。文注には文献引用を含んだり、引用文献一覧に注を施すことがある。

1 環境文学の研究テーマと方法（場所の感覚）

「ネイチャーライティング（nature writing）－環境文学」の定義は複数あるが、⁽²⁾ その一つによれば、環境文学は「1980年代以降のアメリカで多大な注目を集めるにいたった文学上のジャンル」⁽¹⁻²⁰⁾ であり、日本の環境文学研究の中にも「環境問題が顕在化し、社会や文化のありかたが鋭く問われる現在の日本にあって、自然をめぐる言説もまた、詳細かつ厳密な再検討を必要としているのではないか」⁽¹⁻²¹⁾ などと問いかけているものがある。

この文学作品における「自然をめぐる言説の再検討」の主張は、「人間と自然との関係性の多様な意味を解きほぐし、それを再定位化すること」⁽¹⁻²⁰⁾ を試みるものである。こうした「人間と自然との関係性の多様な意味」の解析方法の一つに、「ネイチャーライティングの主要な用語、〈場所の感覚〉を適用」⁽¹⁻²¹⁾ しようとする研究がある。この研究では、現代日本の文学作品を例に「人間と自然との関係をどのように言語化しているかを考察」⁽¹⁻²¹⁾ しているが、その考察にあたって、取り上げた作品では「〈場所の感覚〉という言葉自体を用いてはいない」。しかし「彼らの試みの論拠は場所に求められており、独自の〈場所の感覚〉と呼べるものに裏うちされている」⁽¹⁻²¹⁾ と見ている。ここで〈場所の感覚〉とは「人間が場所との関係においてアイデンティティを獲得、あるいは再確認する行為の中核をなす感覚」と説明されているが⁽¹⁻²³⁾、研究者はこの意味を「ウオレス・ステグナーのエッセイ…場所の感覚（“The Sense of Place”）」⁽¹⁻²²⁾ の一文に求めた⁽¹⁻²²⁾ とのことである⁽³⁾。また同時に、この場所を「現代思想としてのエコロジーの視座から換言するとき、「場所」は人間とその活動をも組み入れた生態系を意味する」⁽¹⁻²³⁾ と述べている。そして人間は同じ生態系に生きる動植物や地形・気象を見たり、その推移や相貌を知覚することで「「場所」を経験」していき、生態系の一部としての自己を知り、「「自分が誰であるか」」を認識して、自然の豊かさに自分の豊かさを重ね合わせたり、それらを通じて「環境の崩壊や危機的状況が、自らの生の危機に等しい」⁽¹⁻²³⁾ とみなしたりするのだと論じている。

これが環境文学の主張の一つであるが、ここにあらわれている特徴として、少なくとも次の三つをあげることができよう。

- (1) 現代日本の環境文学研究では、'80年代以降のアメリカにおけるネイチャーライティング研究の動きに触発されて、その視点と方法（〈場所の感覚〉センス オブ プレイス）により、文学作品を再検討しようとしていること
- (2) 原作者が言葉としては用いていない〈場所の感覚〉を作品の中に見い出すことを通じて、原作者の言説と視角が環境文学研究の視座と重なり合うことを確かめようとしていること
- (3) 〈場所〉を現代エコロジーの視座に転換し、動植物や地形、気象などの生態系を構成するものと考えて、作品の中に生態系と人間との関わりについての言説を見ようとしていること

さてこの研究では、以上のような考え方によって実際に現代日本の作家の四作品を分析している。まず野尻抱影のエッセイ「山・雪・星」（1941年）では、野尻が望遠鏡で山並みを観察した際に、三日月が、はい松のつづくスカイラインの中へ沈んで行くのを見入っていると、「沈みながら、く、く、く、くと音でもしそうで、同時に自分も望遠鏡の筒口をささえながら前のめりになって行くような、

地球がそう回転しているような奇妙な錯覚さえも起こった。」⁽⁴⁾ という一節を引用し、「野尻は…「私」が直接自然と対峙する至福を強調している。「奇妙な錯覚」がみごとに表象する一体感。彼の意図は自然と向き合う際の凝縮された時間を感傷的に言語化することにあつた」⁽¹⁻²⁵⁾ と評している。

次に取り上げられているのは三木卓『海辺の博物誌』(1987年)で、その一節、「一本だけ白い花を咲かせている小さい木」が丘の枯林の中に埋っているのに気づいておどろき、「新鮮な感情がわき出てくる」⁽⁵⁾ を引用して、「生きものや風景と自らが繋がる瞬間がある。……この文面の背後に潜んでいるのは、場所に対する愛着に他ならない」⁽¹⁻²⁶⁾ としている。

次が石牟礼道子の『苦海浄土一わが水俣病』(1969年)である。ここで研究者は、この作品が「共同体の基盤としての場所の意義を改めて検証する……崩壊という現実と直面してはじめて、共同体と場所、そして人間と自然との結びつきのありようが強烈に意識されるという逆説を端的に物語っている」⁽¹⁻²⁹⁾ と述べている。その証しの一つとして、まず「共同体湯堂部落」の、とある井戸の近くに朽ちかけて建っている青年倶楽部がこの「村の生気をいちじるしく欠いてしまう……若者たちが……ことに水俣病がはじまってからは、元にもどらない。どんなに腕のいい漁師でも、それを親から子へと伝授することはもうできない…年寄りたちは、子どもたちにゆずり渡しておかねばならぬ無形の遺産や、秘志が、自分たちの中で消滅しようとしている不安に耐えているようだった。朽ちてゆく青年倶楽部のように、彼らの生身もこころも、風化を続けていた。夏の海辺のどこを歩いても、そのような風が潜んでいた。」という一節を紹介している⁽⁶⁾。これらが語るものはこの研究者にとって「病んだ自然が人間の悲惨に直結することを訴えかけずにはいられない。海が汚染され、健全さと豊穡さが失われるとき、人間の生活も根本から崩壊し、場所も意義を失う」⁽¹⁻³³⁾ ことである。

最後に取り上げられているのが、内山節の『里の在処』(2001年)である。研究ではまずこれに先立って内山が1980年に出した『山里の釣りから』の中では、「荒廃した川の姿に社会の歪みを見出したこと」、「ダム建設、過疎、高齢化に翻弄される山村は都市の経済論理の病理を具現する」ことを語っていると述べている。⁽¹⁻³⁴⁾ そして『里の在処』では、内山が「長年通いつめた村で民家を購入し、「半村人」⁽⁷⁾ の生活を送る」中で見たものは、「共に暮らす仲間」つまり人間と自然との相互性だった」⁽¹⁻³⁵⁾ としている。また、この研究では、内山が「<里>を「魂が帰ることのできる場所」と定義づけ」、「近代化された社会では知性に圧迫されつづけた魂が<里>に帰り、森と川と畑と風と、そして村の人たちとともに居るとき、元の自然な状態に戻っている」と告白」⁽⁸⁾ していることを紹介している。そして内山が「知性が作りだした世界は「何か根源的なものが欠落している」とも指摘」していることに触れて、彼が「『里の在処』を求めるのは……むしろ小さな共同体に身を置くときに、自分自身の生を再検討する機会があるのではないかという予感に基づく行為である」⁽¹⁻³⁵⁾ と分析している。

次に現代中国における環境文学についての研究を見たい。

2 現代中国の環境文学—「環境問題文学」

現代中国の環境文学に関する研究によれば、中国では、環境文学という「新しい文学用語」は、「八〇年代半ばごろから使われるようになった」⁽²⁻²⁶²⁾ とのことである。そこでは「環境文学」の定義の一つとして「人々の大自然に対する愛と環境悪化に対する憂慮を喚起する文学」⁽²⁻²⁶²⁾ があげられ、いくつかの作品の要旨が紹介されている。

まず阿城(1949～)の「樹王」(1985年)は、「原始林の伐採に従事する下放青年たちとそれに反対

する蕭という村民との交流と葛藤」を描いたもので、下放青年の李立は村人から神木と信じられている大樹を「役立たずの木」であり、自然の開発は天ではなく人間がするもの、人間は、蕭がいう「神様とやらも改造する」と主張、蕭の、この樹が「ここまで大きくなるのは、容易なことじゃない。これがもし子供だったら、これを育てた者は伐ることなんかできやしない」⁽²⁻²⁶¹⁾という反対を押し切って伐採してしまう物語をつづった作品とのことである。この研究では蕭は、「自分自身を自然界において決して突出した存在ではなく、他の動植物と対等な一つの存在にすぎないと考え、そのことによって、内なる自然つまり自分自身の生命の営みを外なる自然と無理なくつながらせ、自由に交感し合っていた」⁽²⁻²⁶²⁾者である。彼は、人間が自由に自然を改造することで「人間としての主体性と…自由を獲得すると考える近代思想を信仰していた人々によって否定」されたが、「樹王」はそのことに対して「疑義を呈している」⁽²⁻²⁶²⁾としている。

次に作家徐剛（1945～）の「伐木者、醒来！」（1988年）は全国各地の「森林破壊の生々しい実状を報告し」、「樹木の濫伐、盗伐を至急中止するよう訴えている」⁽²⁻²⁶⁸⁾。また女性作家載晴（1941～）の「長江一三峡工程論争」（1989年）は「山崩れと地滑りの増加、水没する炭鉱・燐鉱からの有害物質による水質汚染、生態系破壊による、カラチョウザメ・長江カワイルカなどの稀少種への影響といった環境問題」⁽²⁻²⁶⁹⁾を指摘していると伝えられる。最後に賈平凹（1952～）の「懷念狼」（2000年）は、「自然界における人間の位置づけについて問い直そうと試みた小説」⁽²⁻²⁷⁵⁾で、狼のイメージを「駆除されてしかるべき動物から保護が必要な動物へと転換させた」⁽²⁻²⁷⁶⁾。ここで主人公は「生態系を意のままに破壊する人類の未来に対して危惧を抱く」⁽²⁻²⁷⁷⁾ようになり、次のように述べているとのことである。

「人は万物の精華であるが、生命の意義から見ればすべての動物、植物、人間は平等に共存しているのであり、弱肉強食は生命バランスのための調節方法なのかもしれない。しかし狼も生命連鎖の一環であるのに、狼は絶滅寸前まで虐殺された。もし伯父の病気…が一種の懲罰ならば、更に大きな懲罰が下るのは獵師だけに限らないであろう。」⁽²⁻²⁷⁷⁾

以上環境文学とされる作品を紹介したが、次に別の角度からする環境文学研究を例示したい。

3 自然描写に関する環境文学の研究—＜交感＞と＜表象＞—

(1) ＜交感＞

文学作品には風景など自然界の姿相や動植物・山岳・湖川などの自然物の描写を含むものが多い。環境文学研究には、これも人間と自然との多様な関係像を示すものの一つとして分析を試みるものがある。『ウォールデンまたは森の生活』（以下『ウォールデン』という）の著者として有名なヘンリー・D・ソロー（Henry David Thoreau, 1817～1862）は環境文学研究の分野では「近代ネイチャーライティングのスタイルを確立した」⁽³⁻⁴⁰⁾人であり、また「自然を含む個々の生命を重視する環境中心主義思想樹立のうえで…画期的な役割を果たした」⁽⁴⁻¹⁾とも評されている。ソローは『ウォールデン』の中で次のような一節を書いているとのことである。

「湖はその風景のもっとも美しく表情に富む部分である。それは大地の目。その中をのぞきこむ者は、自分自身の本性^{ネイチャー}=自然の深さを測るのだ」⁽³⁻⁴¹⁾。

＜交感＞と＜表象＞を扱うこの研究ではソローが自然の中に住む場所として選んだのが、ウォールデンという名の湖水のそばであった「おそらく最終的な理由」は、彼が風景の最も美しく表情豊かな部分である湖を擬人化して「大地の目」と呼び、「その「目」をのぞきこむ者は、「自分自身の本性の深さを測る」」⁽³⁻⁴¹⁾ことになるからだとして述べていること、即ち、「自然を見ることは＜私＞を見るこ

とつまり自然へ向かおうとする志向は、一見〈外部〉へ向かう志向だと見えるが、むしろそうすることによって、逆説的にも、〈内部〉へ向かうことを意味する。なぜなら外部＝自然のなかに、ほかならぬ〈私〉が見いだされるから⁽³⁻⁴¹⁾ であるという。そして『ウォールデン』こそは…〈交感〉原理を自然記述様式の極として実践してみせた作品⁽³⁻⁴⁰⁾ で、風景画にも「外部世界が反映して内部世界となる…定式が存在した…これが近代文学あるいは近代的な感性にとっての〈交感〉という出来事の大筋である」⁽³⁻⁴²⁾ としている。なおこの研究では、「人間と自然の間に何らかの対応関係を読みとる思想を動かす原理を、とりあえず「〈交感〉(correspondence)の原理と呼んでみる」⁽³⁻¹⁹⁾ と定義している。

また、自然の記述を仲介にして本性に到達するなどのメカニズムにはある時代に応じた文化的な規範の影響があり、それがメカニズムに含まれている。例えば自然風景の背後に「神」などの「一個の明確な形面上学的体系」を読み取るなど、「私たちの時代における〈自然〉は、神なきあとの最後の神学とでもいうべき位相を獲得している万能性」⁽³⁻⁶⁰⁾ があることを指摘している。そして「エドワード・アビー (Edward abbey) という現代ネイチャーライター」が、「アリソナの溪谷の断崖に立ったとき」⁽³⁻⁴⁷⁾ 見える限りの向こうに何も無いこと、「あるのはただ砂漠。沈黙の世界だけだった。これだ、探していたものは」⁽⁹⁾ と述べたことを、「自然の背後に何かがあるという…信仰はここでは20世紀的に明快に断たれている…あえて何も見まいとするとき、20世紀的な〈交感〉の問題が立ちあらわれる…そこには規範以前の〈自然〉が横たわっている」⁽³⁻⁴⁸⁾ と評している。

なおこの研究では前記のような「自然を精神の何らかの象徴的対応物とみる発想は…一種の「ヒューマニズム」(人間中心主義と読む)であり、イデオロギー的な表象の暴力であることにどれほど気づいているだろうか」⁽³⁻⁶¹⁾ とも述べている。

(2) 〈表象〉

環境文学(ネイチャーライティング)とは何かを説明する際に、「ヒトは自然と交感し、それをさまざまに表象してきた。ネイチャーライティングというジャンルは、それを伝えるもっとも明白な声である」⁽¹⁰⁾ とされることがある。環境文学研究の中にはこの表象を、アメリカのロマン主義文学の代表者の一人として著名な、R. W. エマソンの日記にある一節、即ち、「詩人はもはや雪を雪と、馬を馬とは見做さず、雪や馬が意味を与えているところの内的諸事実⁽¹¹⁾に代わるものとして(representatively)、それらを見、かつ名づけるのである」⁽¹¹⁾ (傍点は同研究の著者)を例にとって説明するものがある。つまりそこで詩人は自然物を描写しているのではなく、「雪や馬といった自然物が代行＝表象的に指示するその「内的諸事実」＝意味に焦点を合わせている。このときこそ雪や馬が象徴として機能するときにほかならない。その際、自然物という外的諸事実はいかにもエマソンの意味合いにおいて、「透明な」存在と化している」と言っている⁽³⁻⁷⁸⁾。こうした表象作用をこの環境文学研究では「〈超越〉の理路」⁽³⁻⁷⁸⁾ と呼び、「自然詩の近代西欧における成立過程の根柢」にこれが「貫徹されていて…自然は超自然へという「普遍存在」への超越願望を詩的機制の内部にあたかも自然そのもののように潜ませ」てきたとするとともに、「自己認識の手段としての自然認識という〈交感〉の様式はけって潰れ去ったとはいえないのである」⁽³⁻⁶⁰⁾ と述べている。

一方この研究では、「私たちの眼は、神の啓示を読み解くために必要な能力を与えられていない、「備えのない眼(unfurnished eyes)である」⁽⁵⁻²²⁷⁾ と述べているとされる、19世紀の女流詩人、エミリー・ディキンソン(Emily Dickinson, 1830~1886)がうたった次のような詩について、「彼女が切っ捨てて棄てるのは、幻影を象徴に転化することで美を幻影ならぬ真理に変換しようとする超越論的思考にほかならない」⁽³⁻⁹²⁾ と論じている。

孤独な土地の 四本の樹
意図もなく
秩序も 動く気配もなく
佇っている

（中略）

樹は自然のすべてに どんな役割を果たし
どんな計画を それぞれに
遅らせ 進めているのか
知らない⁽¹²⁾

そしてこの研究ではエマソンやホイットマンなどの「文学史的文脈にしたがってその位置を測ろうとするがぎり、ディキンソンのポスト・ロマンティックとしての位置は明瞭である。」⁽³⁻⁹¹⁾と結論している。

なおディキンソンの詩の一節には「自然という見世物一座」というくだりがあり、⁽¹³⁾ またその書翰には「自然は幽霊屋敷です。芸術とは幽霊を仕掛ける屋敷のことです」⁽³⁻⁹²⁾ という一文があるとのことで、これは「自然に自然以上のものを見てしまうことは、まさしく存在しない「幽霊」を見て語るにひとしかったから」⁽³⁻⁹²⁾と解説されている。

またこの研究では、アメリカにおける19世紀風景美学の形成も論じている。それによれば、19世紀のアメリカではコネティカット川やハドソン川の流域がいち早く観光地化が進められた。とくにコネティカット渓谷は、観光史家のシアーズ (John F.Sears)⁽¹⁴⁾によれば「合衆国で最初にパノラマ的観点からとらえられた場所のひとつ」⁽³⁻¹¹¹⁾とのことである。なお彼が「高所から自然を見ることは、美的距離と情緒的距離を生み出すが、これこそピクチャレスクの要件である」⁽¹⁵⁾ ⁽³⁻¹¹²⁾と述べたことも引用している。この一節は、後述するように『孤独な散歩者の夢想』（以下『夢想』）におけるルソーの一文を思い出させるであろう。

またシアーズは「このようなパノラマ的要素を風景の「劇場化」と呼び、風景を「連続的な景観」として消費する旅行者の慣行の成立が風景美学の浸透を加速し、それと相乗する形で観光地化の成立が促された」⁽³⁻¹¹²⁾とのべているとのことである。一方アラン・ウォラク (Allan wallach)⁽¹⁶⁾は、19世紀文学ではこのようなパノラマ的な語りが常套の形態をなしていると述べているとされる。即ち、①紀行文学の語り手ないしフィクションの作中人物が山や丘などの高所に登ってパノラマ的な景観を見るが、この段階では圧倒的な「サブライム」感覚が記述される。②この崇高感が弱まると、風景の各構成要素への注目が始まるがその注目は次第に詳細化されていく。③また同時に風景規模の壮大さへの注目（高度や距離の測定など）も行われ、部分への注目と全体への着目が交互にあらわれる^(以上 3-113~114)。

なお、ウォラクはこうした「語りの常套」(narrative convention) 的形態としてのパノラマ描写は、19世紀文学と絵画が共有していると述べているとのことである⁽³⁻¹¹³⁾。

最後にこの研究は環境文学の今後の「方位」を論じている。そこでは「検討すべき問題」の一つとして「20世紀末の新しい環境思想との関係や差異の照合など、「ポスト・ロマン主義」ともいべき思想的課題」⁽³⁻²²²⁾をあげるとともに、これまでの「ロマン主義をいかに相対化し、いわば新たなロマン主義のかたちをいかに実現するかが、ネイチャーライティングによる問いとして提起されている」⁽³⁻²²²⁾と述べている。

4 ルソーにおける「環境文学」とその位置

環境文学研究が取り上げる文学作品には、洋の東西にわたる多くのものがあるが、これまでにその中から三種類の研究を選び、環境文学の主張とその作品内容に対する論評の一端を見た。ではこのような文学研究における「環境文学」の主張とルソーの作品の内容は、どこまで重なりうるものを持つといえるであろうか、換言すればルソーの文学研究の新しい切り口として、「環境文学」研究はどこまで有効なのであろうか。これらを他の研究例も参照しながら、これまでの筆者によるルソーの作品に関する検討結果と比較することを中心に、以下述べてみたい。

(1) <場所の感覚>とルソー

場所が人間にとって持つ多様な意味については、現代の風景研究の一つが、風景は「人間的存在の基盤、…私たち自身のよりどころ、支え」⁽¹¹⁻⁵⁾などと述べて、環境文学が主張するように、場所がアイデンティティの獲得や再確認に役立つことを指摘している。また、イー・フー・トウアン（段義妥）の「トポフィリア」（場所への愛）の主張も、「環境保護運動の初期に考えられた」もので、「人が場所に対してもつ感覚」⁽⁶⁻¹⁶⁰⁾をその内容としている。場所が人に対して持つ意味については、他分野からも既に接近が試みられているのである。

第1節などで見た限りでの、環境文学の<場所の感覚>はほぼ、① アイデンティティの獲得や再確認、② 生態系につながる存在としての自己及びその豊かさや危機と自己との関係の知覚、③ 「魂が戻ることができる場所」としての<里>=材落共同体に身を置くことによる、近代社会の知性に圧迫された自己の生の再確認、の三つについて説明しているものと理解されよう⁽¹⁷⁾。これらをこれまで検討したルソーの作品と比較すると、次のように言うことができるものと思われる。

- ① については、ルソーは『夢想』に見るように「魂が十分に強固な地盤をみいだし、そこにすっきり安住」した状態、「充実した完全無欠な幸福」^(7-1046,7-87~88)を味う状態を、水上の舟中や湖の岸辺など水を主景とした風景の中で「しばしば経験をした」とのべている。また牧場、水流、森、人気のない場所が自分への迫害・憎悪・軽蔑・屈辱を忘れさせ、その記憶は「みじめな運命におかれている現在でさえ、じつにしばしばわたしを幸福にしてくれる」^(7-1073,7-126)と語っている。ルソーはこれらの文面では<場所の感覚>という言葉は使用してはいないが、それらは、環境文学が指摘する、アイデンティティを獲得したり、再確認できる場所のことを述べているものと思われる。こうした例は、デンマーク犬による人事不省事故から蘇生し、風景を知覚した瞬間のルソーの感覚⁽¹⁸⁾や『夢想』にある人生回帰と風景の記憶との結びつき、『告白』に見るヴァランス夫人と過ごしたレ・シャルメットの甘美な記憶⁽¹⁹⁾など、他にもあげることができよう。
- ② ルソーが生態系の存在に気がついていたことは、彼が『化学論』の「自然のメカニズム」⁽¹⁾のほかに、「ヴォルテール氏への手紙」の中でも「宇宙の体系において、人類の保存のためには、人間と動物と植物とのあいだに物質の循環が存在することが必要であるなら、その場合には、一個人の特殊な不幸は全体の幸福に寄与します。私が死ぬ、すると、私は蛆虫に食べられる…私は…自然の命ずるところによって、すべての人々のために行なうのです。」^(8-1068,8-22)としていることから知られる。

また自然の豊かさと破壊に自分や人間の幸、不幸を重ね合わせるという特徴のうち、まず前者の自然の豊かさとの関係についてルソーは、人間の眼前に展開する「自然の三つの領域の諧調からわきあがってくる洗惚感」を与えられ、「広大な美しい体系……に同化した自分を感じる」^(7-1062~1063,7-110~111)と言っている。後者の部分は、三木卓が述べた「生きものや風景と自分が繋がる瞬間」や野尻抱影の地球の自転にあわせて「自分も前のめりになっていくような」感覚と似たも

のが感じられる。さらにルソーは「製鉄所、溶鉱炉…煙と火の渦巻く工場が田園の仕事の楽しい光景にかわる」こと、「鉱山経営」が「緑の野や花、青い空」を変えとともに、「恋する牧人や頑健な農夫たちの姿」にとってかわって、「鉱山の毒気に憔悴したみじめな人たちの青ざめた顔」^(7-1067,7-117)があらわれるとのべている。これらは環境破壊がそれまでの人間の生活と生きてきた場所を破壊することを指摘した、石牟礼道子のトーンと近いものを持つと言ってよからう。

- ③ の、自然と人間の相互関係の知覚は、上記②に述べた所でもある。また近代社会の知性に「魂」が圧迫されることやそれが戻る場所が<里>であることも、①で見た迫害された自己を癒すものが自然であるというルソーの考え方と通い合う所があろう。さらに知性が作る世界には何か根源的なものが欠けているという内山の主張は、いわばルソーの基本的なテーマ「自然に帰れ」に通底するものがある。その作品の中には、「わたしたちをおさえつけているいっさいの社会制度がその人の自然をしめこらし、そのかわりになんにももたらさないことになるだろう」^(12-245,12-23)とか「学問、文学、芸術は……根源的自由の感情を押し殺し…」^(9,9-66)などの言辭が見い出される。

(2) 「環境問題文学」との関連

現代中国文学の文学運動の流れのひとつが、開発による環境問題の発生をめぐる諸情況を描写、批判する、「環境問題文学」であることは前述した。ルソーにおけるこうした特徴は、『不平等論』⁽²⁰⁾原注その他の言説にあらわれている⁽¹⁾。彼は文明化の進行が社会的不平等を促進するばかりか土質などの自然環境を破壊すること、鉱業化の普及が健康問題を惹起することなどを追求し、自らの基本テーマの一つである文明社会批判の一つの理由としている⁽¹⁾。

徐剛などの作品の中に示された森林濫伐の即時中止を求める声はルソーの「コルシカ憲法草案」に見るように、コルシカ島における森林問題、即ち島の人口の増加と開墾の進行による林野の荒廃や短期的な回復が困難なことの指摘、そのための確固たる森林行政の必要性和それによる世代間利用の訴え⁽²¹⁾などと響き合うものがあると思われる。また動植物に人間の実用的価値とは独立した、人間と平等の生命価値を見い出そうとする主張もこれまでの拙論で触れた通り、彼の植物観⁽²²⁾、動物の権利⁽²³⁾に関する考え方、それに人間中心主義自然観の否定⁽²⁴⁾などとほぼ同旨と思われる主張と見ることができよう。なお、生命連鎖の指摘は前記「ヴォルテール氏への手紙」のほか、『言語起源論』⁽²⁵⁾における生態的地位間の食物連鎖の指摘に一脈通じるものがあると考えてもよいのではなかろうか。

(3) ルソーの作品における<交感>と<表象>

ア 交感

前節の3で見た通り、「人間と自然との間に何らかの対応関係を読み取る思想を動かす原理」が交感（コレスポンドンス）の原理とよばれていた。ルソーの自然描写、風景描写にはこれまで見たように、この外的自然と内的自然の対応、交感の例が多く見られる。ルセルクル（Jean-Louis Lecerclé）はルソーのある風景描写を評して「主体と客体のあいだには照応（correspondance）が存在する」^(10-227,10-276)と述べた。また既に風景研究の一つにも風景と我々自身の間には「呼応や共振の関係がある」⁽¹¹⁻²¹⁴⁾とする考え方がある。ソローはウォールデン湖を「大地の目」と呼び、それをのぞきこむ者は、「自分自身の本性=自然の深さを測る」と言ったが、ルソーもまた『夢想』においてピエヌヌ湖の中の小さな島の土が削られて大きな島の風波による崩壊修復に充てられるのを見て「こんなふうには弱者の身体はいつも強者のために利用される」^(7-1041,7-80)と言った。ルソーは「不正と邪悪の光景はいまでもわたしの血を怒りに沸きたせる」^(7-1057,7-102)とも述べている。強者と弱者の間の不平等を批判して『不平等論』を書き、自由・平等な社会構築をデッサンした、『社会契約論』を出版したルソーにとって、こうした島の光景は不平等を憎む彼の本性と照応、交感するところがあつたにちがいない。

るまい。

また前節3の(1)によれば自然の背後に神などの「一個の形而上学的体系を読み取る」ことも交感のひとつとされている。ルソーもまた自然の背後に神を読み取っている。これは『エミール』におけるサヴォワの助任司祭の信仰告白によくあらわれている⁽¹⁾。彼は自然の創造者が神であること、神は「草をはむ羊、空を飛ぶ小鳥…のうちにも存在する」^(12-578,12-139) ことを感じると述べるほか、植物採集でその構造などの探求による楽しみも与えてくれる「御手」(La main)に感謝を捧げている⁽¹⁾。

一方現代のネイチャーライターのアビーや<表象>を論じた部分に登場するデイキンソンなどはこうした自然に対する超越的な視線を排除しようとしているとのことである。こうした態度は、ルソーの場合にはほとんど見出し難いといつてよいであろう。彼は迫害にさらされている自分の無実を神が知っていると確信することで、心の安定を得ようとしている⁽²⁶⁾。

イ <表象>

自然と交感することの多いルソーには表象行為もまた多く認められる。彼は既刊の拙論⁽¹⁾で見たように、内面にあるさまざまな思いを自然に託して述べたり、自ら信じるところの例証を自然に求めたりしている。これらはいわば自然の記号化=表象化⁽²⁷⁾ともいえよう。

ここにみられる特徴を整理するとおおよ次のようになろう。

- ① 自然の個物化を記号化するレベルがある。その例は前記の二つの鳥の姿相に自らのテーマを重ね合わせていること、また花壇の花が人間に対して「市民社会で行われているように」本来の能力を奪われていると見て、そこに万物を作る者の手を離れ、人間の手につつて悪くなったものの例証を感じていることなどをあげることができる⁽¹⁾。
- ② これらの自然個物が複数個集まってルソーの内面を表象するというレベルである。これは既に拙論⁽¹⁾でも触れた「ルソー的な桃源境」(Locus amoneus rousseauiste)などがその例で、A. トリペ(Arnauld Tripet)は山の中腹、島、庭園、田園の四つをあげている⁽¹³⁻⁶⁶⁻⁶⁷⁾。これらは、古典文学以来の「至福の風景」(Locus amoneus)の定式の伝統を汲んでいるとも考えられる。
- ③ 上記の庭園のような、ある区域における自然の集合体のレベルで、『新エロイズ』におけるジュリの庭園(果樹園—エリゼ)がこの例であろう。これは人工の手が加わったあとが完全に隠れるほど人智を尽した「自然」の庭園と説明されている^(14-471-472,14-129-130)。ルソーは明確には述べていないが、そこに我々は、人間の手につつて悪くなった世界や人間も、ルソーが考えるような適切な政治、社会制度を人工的に構築し、教育を工夫すれば、万物を創る者の手から離れる前の自然の状態を作り出すことができるという彼の信念が暗黙のうちに表象されているものと推察できよう。
- ④ 宇宙全体あるいは大きな自然の風景の背後に神あるいは神意を知るテキストないし聖句を見い出そうとするレベルである。ルソーはこれも拙論の一つ⁽²⁸⁾で取り上げたように、宇宙における天体の規則的な運行などに「知的な存在」を感じたり、サヴォワの助任司祭がエミールにその自然宗教論を説く舞台となった自然の「壮麗な景色」は、助任司祭の話の「テキスト」(舟橋豊によれば「聖書の聖句」⁽¹⁵⁻¹⁶⁴⁾)を「提供しているようだった」と言っている。これらは前記<表象>論で述べられている、「普遍存在」への超越願望の一例とも思われよう。

また<表象>論の中で注目されるのは、パノラマ的な劇場化の所で述べられた、パノラマ描写の「常套的形態」である。

ルソーはサンピエール島の山の上に立って見た、パノラマ的な風景を語っている。まず最初の記述

は湖水と湖畔の雄大な、心を奪われるばかりのながめ (le superbe et ravissant coup d'oeil du lac et des ses rivages) ^(7-1045,7-85) であり、これは前記ウオラクの段階でいうと、いわば「圧倒的なサブライム感覚」でもあろう。次の記述が「近く of 山々、肥沃な平野」であり、「風景の構成要素」が出てくる。そして最後は、この「ながめ」(La vue)、風景が「遠く平原をかぎる薄青い山々にまでひろがっている」という、「風景規模の雄大さ」（ここでは距離の広がりがある）の描写となっている。ルソーのこうしたパノラマ描写の順序は、19世紀文学のパノラマ風景描写の、サブサイム感→風景の構成要素への注目→壮大な規模の描写という「常套的形態」とも似た点を既に持つものとも思われよう。

以上、環境文学の研究テーマと方法、及び作品研究の一端を見るとともに、それらとルソーの作品との関連を検討してみた。

まとめ

環境文学の三種類の研究にあらわれた〈場所の感覚〉、「環境問題文学」、〈交感〉と〈表象〉は、今見たようにルソーの作品にも認められる所であり、その意味でルソーを環境文学の視点と方法から探求することは、その文学作品の検討に新たな視角をもたらす可能性を探ることにつながるものとも思われよう。既に環境文学研究の例では、ルソーが「宇宙詩の最初の授業」を説く箇所、子ども自身による「自然の再発見」のための学習方法（彼の「消極教育」の一種と思われる）を述べる前段階として、『エミール』のなかの風景描写の一節を検討 ⁽²⁹⁻⁸⁰⁻⁸²⁾ しているものなどがある。〈場所の感覚〉に関する研究では、〈場所の感覚〉というキーワードが、「自然をめぐる言語行為の系譜の再検証を要請している」⁽¹⁻³⁸⁾ と述べられている。環境文学の「作品ガイド」としてアメリカ、イギリス、日本の120の作品を取り上げている著作 ⁽³⁰⁾ もあり、フランス文学におけるこのジャンルの系譜再検証の一環として、ルソーの作品研究が役立つところがあるものとも思われよう。

〈交感〉と〈表象〉の研究では今後の「ネイチャーライティングの方位」を論じている。そこでは「イギリス・ロマン主義研究の視点からの歴史的再検討の試み」⁽³⁻²²²⁾ の中に、前述したように「20世紀末の新しい環境思想との関係や差異の照合など、「ポスト・ロマン主義」ともいべき思想的課題」⁽³⁻²²²⁾ も含まれており、「ロマン主義をいかに相対化し、いわば新たなロマン主義のかたちをいかに実現するかが、ネイチャーライティングによる問いとして提供されている」⁽³⁻²²²⁾ と述べられている。

ここでいうポスト・ロマン主義とは、まず上述にあるように環境思想との関連、即ち人間に物質的、精神的思恵を与えるものとして自然を見るという、いわば人間中心主義的な「自然と人間」観ではなく、環境としての自然とそこに生きる生命の一つとしての人間との関係を問い直すという意味が指摘できよう。またアビーやディキンソンに見るように自然の背後に神を見ることを排除するという考え方も既に触れたように、20世紀的な断絶ないしポスト・ロマンティックと呼ばれている。さらにこの研究ではアニーディラードの『ティンカー・クリークのほとりで』(1974) という作品が「〈自然〉の外部化が疎外された自己の定位であることに違いはなく、ポスト・ロマンティックとでもいべき場所から、改めて〈交感〉の原理を問題化しているといえる」⁽³⁻²⁷⁾ と述べている。この作品の研究によれば、ディラードは動物の親子間の捕食や洪水などの自然の猛威などに注目しており、その自然の見方は「即物的で……純粋な残酷、純粋な悪の連鎖であるような自然」⁽⁵⁻³⁴⁸⁾ を見出ししているとのことである。そして「ディラードの「汎無神論」的な自然探求は……世界の〈裂け目〉をわれわれに呈示している」⁽⁵⁻³⁵²⁾ と評されている。

環境文学の系譜におけるルソーの位置を今仮にこうしたロマン主義からポスト・ロマン主義へとこの流れに沿って考えると、ルソーには、既述の通り自然の背後に神を見まいとする態度は見出し難く、むしろ汎神論的傾向があるとも評されている⁽¹⁾。また拙論の一つで述べたように彼はR・ボイルとともに自然の善性を強調し、カントとは異なって⁽²⁸⁾残酷で人間などに多くの被害をもたらす自然の一面には目を伏せているところがある。しかしこれまで論述した通り、彼は自然を生態系を持つ環境としても把握するとともに、文明化による環境問題の発生を指摘し、人間中心主義の自然観を排していた。環境文学研究の流れの中でこれらに注目してみる時、ルソーの片足が深くロマン主義に踏み込んでいたことは疑いないところであろう。しかし彼の持つもう片方の足は、少なくとも自然を環境と把握することを通じて、また文明化による環境問題の発生への指摘や人間中心主義的自然観の否定などを通じてポストロマン主義の特徴の一つに触れていたと評しうることも許されてよいのではなかろうか。彼は19世紀以降の近代ロマン主義文学の先駆けの一人として名高いが、環境文学研究の観点から見る時、ここにルソーの文学史上における新たな位置づけを見出しうる可能性が示唆されるものとも思われよう。「人間中心主義から環境中心主義へとシフトする」⁽³⁻²²⁹⁾ ネイチャーライティング研究において、上述の特徴を持つルソーの作品は、こうした変容を文学史的に検討する時に、その過渡期としての素材の一つを提供しうるのではなかろうか。

〔A〕 文注

- (1) 荒井宏祐「J-J.ルソーにおける自然界の認識—考察序説—」『文教大学国際学部紀要』第10巻第2号(2000年2月)、同「J-J.ルソーにおける自然空間の諸相と「化学論」に見る生態学的認識—研究序説—」同紀要第10巻第1号(1999年10月)、同「『孤独な散歩者の夢想』(J-J.ルソー)における老年期の課題と風景の世界—考察序説—」同紀要第11巻第1号(2000年7月)など。

他に、「J-J.ルソーにおける「自然」・「社会」・「環境」認識と「環境教育」をめぐる考察序説」『文教大学国際学部紀要』第8巻(1998年3月)、同「J-J.ルソーにおける自然環境の認識と社会的ジレンマ問題—考察序説」同紀要第9巻第1号(1998年10月)

同「[ニュートンとJ.J.ルソー —18世紀ヨーロッパにおける自然と神—」同紀要第15巻第1号(2004年7月)など。

- (2) 例えば、次の定義があげられる。

ア 「一般に自然に関するノンフィクションのエッセイのことを指す」(野田研一『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社2003年11頁)

イ 「ごくかいつまんで言うならば、それは人間と自然との関係を前景化する言語表象行為とみなすことができる」(生田省悟「覚醒する〈場所の感覚〉—人間と自然環境をめぐる現代日本の言説」野田研一、結城正美〔編〕『環境文学論序説 越境するトポス』彩流社2004年20頁)

ウ 「もっとも基本的な定義に従えば、ネイチャーライティングとは、自然と人間とのかかわりを省察する「一人称形式によるノンフィクション」を指している。また特に環境文学と言う場合には、ノンフィクションから詩や小説や演劇まで、自然がクローズアップされるすべての文学を含むことになる」(文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング 作品ガイド120』ミネルヴァ書房2000年i~ii頁)

- (3) Wallace Stegner “The Sense of Place”

Where the bluebird sings to the lemonade springs : Living and Writing in the West / Wallace

Stegner. …1st ed. …Random House, 1992, P. 199～206

結城正美他訳「場所の感覚」『フォリオ 2号—特集；＜自然＞というジャンル、アメリカン・ネイチャー・ライティング』ふみくら書房1993年112頁～124頁。

（著者は、penguin Books, 1993, P.199～206から引用のこと）

- (4) 野尻抱影『山・雪・星』1941年197頁～198頁（引用者による引用。〔B〕の1の25頁参照）下記により原文通りのルビを加えた。鶴見俊輔、安野光男、森毅、井上ひさし、池内紀『大いなる自然＜新ちくま文学の森12＞』所収の同作品筑摩書房1995年102頁
- (5) 三木卓『海辺の博物誌。』（1987）小学館1996年215頁。〔B〕の1の26頁参照。筑摩書房版（1987年）では223頁～224頁
- (6) 石牟礼道子『苦海浄土—わが水俣病』講談社（1969年）1972年7～9頁
- (7) 内山節『里の在処』新潮社2001年 185頁では「半村民」（Bの1の34頁参照）
- (8) 同上20頁（Bの1の35頁参照）
- (9) Edward Abbey :*The journey Home : Some words in Defence of the American West*. New York:Dutton 1977 P. 22。訳は〔B〕の3（野田）48頁と同訳書『荒野、我が故郷』宝島社1995年40頁参照
- (10) 〔B〕の3の広告文から
- (11) Ralph H. Orth and Arfled R. Ferguson eds., *The Journals and Miscellaneous Notes books of Ralph Waldo Emerson*, vol. X 111,1852～1855, P.392（The Belknap Press of Harvard University Press,1977による）
訳は〔B〕の3の78頁による。
- (12) Thomas H. Johnson ed., *The poems of Emily Dickinson*, J742.Cambridge, Massachusetts, and London, England, The Belknap press of Harvard University press, 1958
（(12)の出典は〔B〕の3の野田による）
訳は同89頁～90頁による
- (13) 同上（野田） 88頁参照
- (14) John F. Sears, *Sacred Places ; American Tourist Attractions in the Nineteenth Century* Newyork Oxford University Press 1989
- (15) 同上54頁に ‘Looking at nature from a high places insures the aesthetic and emotional distance which the picturesque required’ とある。
- (16) Allan Wallach, “Making a picture of the view from Mount Holyoke,” in David C.miller, ed, *American Iconology; New Approaches to Nineteenth-Century art and literature*, P.80
- (17) ①～③は〔B〕の3（野田）の113頁～114頁により作成。
- (18) 〔B〕の7-1005、7-27参照
- (19) ルソー著桑原武夫訳『告白』上 岩波書店（321頁以下）参照。Œuvres Completes, plèiade, tome, I（以下O.C.,t. I などという）,P.225以下
- (20) O.C.,t.Ⅲ, “Discours sur l’origine et le fondement de l’inégalité” P198、本田喜代治、平岡昇訳『人間不平等起原論』岩波書店、138頁～140頁
- (21) O.C.,t.Ⅲ “Projet de Constitution pour la Cores” P.927以下、遅塚忠躬訳「コルシカ憲法草案」『ルソー全集』第5巻白水社1989年 319頁以下参照
- (22) 前記（1）の紀要第8巻

- (23) 同上
- (24) O.C.,t.IV,Rousseau : Lettres Morales, 戸部松美訳「道徳書簡」『ルソー全集』第10巻白水社1989年参照
- (25) 前記(1)の紀要第10巻第2号
- (26) 前記(1)の紀要第11巻第1号
- (27) 前記(1)の紀要第9巻第1号
- (28) 前記(1)の紀要第15巻第1号
- (29) 斎藤太郎「風景としての自然」と文学」柴田陽弘編著『自然と文学 環境論の視座から』慶應義塾大学出版会2001年
- (30) 文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング 作品ガイド120』ミネルヴァ書房2000年

〔B〕引用文献

- 1 生田省悟「覚醒する〈場所の感覚〉—人間と自然環境をめぐる現代日本の言説」野田研一 結城正美〔編〕『環境文学論序説 越境するトポス』彩流社2004年
- 2 杉野元子「現代中国の環境文学」柴田陽弘編著『自然と文学 環境論の視座から』慶應義塾大学出版会2001年
- 3 野田研一『交感と表象 ネイチャーライティングとは何か』松柏社2003年
- 4 伊藤詔子『よみがえるソロー ネイチャーライティングとアメリカ社会』柏書房1998年
- 5 朝比奈緑「エミリー・ディキンソンと『アウトドア・ペーパーズ』 ナチュラリスト・ヒギンソンへの手紙」スコット・スロヴィック／野田研一編著『アメリカ文学の〈自然〉を読む』ミネルヴァ書房1996年
- 6 イー・フー・トゥアン著 小野有五・阿部一共訳『トポフィリアー人間と環境』せりか書房1995年
- 7 O.C.,t.I “Les Rêveries Du Promeneur Solitaire.” 今野一雄『孤独な散歩者の夢想』岩波書店1998年
- 8 O.C.,t.IV “Lettres à Voltaire” 浜名優美訳「ヴォルテール氏への手紙」『ルソー全集』第五巻 白水社1989年
- 9 O.C.,t.III “Discours sur Les sciences et les arts” 平岡昇訳「学問・芸術論」世界の名著36『ルソー』中央公論社1998年
- 10 Jean-Louis Lecercle: *Jean-Jacques Rousseau Modernité d'un classique* Libraire Larousse, Paris 1973 ジャン＝ルイ ルセルクル著 小林浩訳『ルソーの世界あるいは近代の誕生』法政大学出版局1993年
- 11 山岸健『風景とは何か 都市・人間・日常的世界』日本放送出版協会1993年
- 12 O.C.,t.IV, “Émile” 今野一雄訳『エミール』中岩波書店1997年
- 13 Annales de la Societé de Jean-Jacques Rousseau tome. 40, 1992
- 14 O.C.,t.II, “La Nouvelle Héloïse” 安土正夫訳『新エロイズ』(三) 岩波書店1997年
- 15 舟橋豊「「自然」の変容とルソーとディドロにおける自然の観念(3)」『名古屋大学総合言語センター言語文化論集』II—2 1981年